

コロナ禍での高齢者のケアの変化

作成者: Rapid Access International, Inc.

2022 年1 月

55 歳以上向けアクティブ・アダルト・コミュニティに関する弊社の最近の記事では、コロナ禍に言及し、社会的孤立のリスクを減らす安全な選択肢を作り出す必要性やニーズについて取り上げた。こうしたニーズはアクティブ・アダルト・コミュニティ市場における需要の原動力の1 つになり得る。しかし、社会的孤立というテーマは、さらなる注目に値する。

コロナ禍において少なくとも短期的に平均寿命の低下傾向¹をもたらしたすべての要因を切り分けるのはやや難しい。新型コロナウイルス自体による死亡者も出ている。さまざまな併存疾患が関与していることも多いため、要因を定量化することは容易ではない。さらに間接的な要因としては、コロナ禍のリスク（現実のリスクと認識上のリスクの両方）のために、病院への到着や処置が遅れたことによる死亡や疾病がある。経済的ストレス、人間関係のひずみ、社会的孤立もコロナ禍の影響によるところがあり、多くの人が危機に追い込まれている。これらはすべて、社会におけるメンタルヘルスの悪化につながるリスク要因となっている。

コロナ禍で高齢者を支える介護施設

米疾病予防管理センター（CDC）は、コロナ禍の初期段階から 85 歳以上を新型コロナウイルスによる死亡リスクが最も高いとしていた。特にワクチン接種前は、この層にとって新型コロナウイルスは非常に危険なものだった。50 歳以上もリスクが高いと考えられている。

こうした現実には 2020 年 3 月～4 月以降の数か月で十分に認識され、リスクの高い人はコミュニティからのほぼ完全な隔離が事実上求められるようになった。その結果、特に高齢者の社会的孤立が深刻化している。ある記事によると、「CDC は、米国科学工学医学アカデミーを通して、孤独や社会的孤立は早期死亡のリスクを著しく増大させるものであり、喫煙、肥満、運動不足によるリスクに匹敵するほどであるとの考えを示している。認知症、心不全、うつ病のような、既存または潜在的な健康問題は、孤独や社会的孤立によって著しく増加する」という²。

¹ Victor Jack 「調査報告: コロナ禍により平均寿命の低下が第二次世界大戦以降で最大に」 Reuters。2021 年 9 月 26 日。参照: <https://www.reuters.com/business/healthcare-pharmaceuticals/covid-19-pandemic-cut-life-expectancy-by-most-since-world-war-two-study-2021-09-26/> 2022 年 2 月 4 日閲覧

² Jane Vick 「コロナ禍の高齢者ケア: 介護施設や非営利団体はコロナ禍で高齢者を支援するためにどのような変化を遂げたか」 Pacific Sun。2022 年 1 月 19 日。参照: <https://pacificsun.com/elder-support-during-covid/> 2022 年 2 月 4 日閲覧

状況はかなり暗い。カリフォルニア州サンフランシスコ・ベイエリアの無料週刊紙『ザ・パシフィック・サン』は、サンタローザにあるソルスティス・シニア・リビングの施設長、ポール・ベック氏にこの件でインタビューを行った。尋ねたいことは、コロナ禍において入居者のニーズを満たすために同施設や他の団体がどのように変化したかである。

実際、こうした施設に職員を留めておくことは米国全体で難しくなっており、単にサービスを維持することも容易ではなくなっている。しかし、ソルスティス・シニア・リビングをはじめとする多くの介護施設は成功を収めており、その成功要因は、コミュニティとのコミュニケーションをそれまで以上に重視する方針を取ることで、入居者が安全に関わり合い、つながることができるような方法を見つけたことである。

ベック氏は次のように話している。

本当に最も重要なのはコミュニケーションを維持することです。私は7日~10日ごとに入居者にメモを提示して最新情報がわかるようにし、毎月1回は顔を合わせて施設の人員配置や進捗状況などの最新情報を伝えています [状況の変化や変異株など、コロナ禍についての詳細も含む]。入居者は、状況の変化に応じた最新情報を得ることで、つながりを感じることができます。ようやく2回目のワクチンが全員に行き渡った2021年3月には、再び直接集まることができ、人々の気持ちが高まりました。また、閉鎖中にコミュニティ全体の改装を行いました。再び直接顔を合わせることはもちろん、完全に改装された施設に戻り、みなさん本当に生き生きとしていました³。

ベイエリアにある介護施設、スプリング・レイク・ビレッジの職員もコミュニケーションに関して同様の経験を語っている。

私たちは入居者を支援する方法や、職員のあらゆる活動を知らせるためにつなかりを維持する方法を考え出す必要がありました。実は、今では高齢者が、こうした状況でなければ恐らく持っていなかった携帯電話、iPad、コンピュータ、電子メール、Zoom会議を使ってコミュニケーションを取っており、そのおかげで私たちはつなかりを維持できています。高齢者は聡明であり、人間の学ぶ力には常に驚かされます。そして、つながりの必要性が本当に爆発的に高まったため、どうすれば入居者がつなかりながら健康も維持できるかを考え出す必要が生じました。かなり成功できたと思います⁴。

³ 同上

⁴ 同上

こうした介護施設が人員不足に直面しながら入居者とのコミュニケーションを強化することは至難の業である。入居者がテクノロジーの力を借りて大切な人と安全に連絡を取り合うことができるよう、支援を提供する方向にさらに舵を切れることは、真に称賛に値する。介護施設に住む高齢者のコロナ禍による孤立との闘いにおいて、これらの取り組みが重要な役割を果たしていることは間違いない。